

## 博士学位論文審査要旨

申請者：田中 裕

論文題目：豊前火力反対運動の環境概念について

副題：場所における自然の重層性に関する研究

申請学位：博士（学術）

審査員：主査 伊藤 守 早稲田大学教育・総合科学学術院 教授

副査 若林 幹夫 早稲田大学教育・総合科学学術院 教授

副査 北山 雅昭 早稲田大学教育・総合科学学術院 教授

副査 町村 敬志 東京経済大学教授

10月21日の13:00から15:00にかけて、田中裕氏の学位申請論文の公開審査を実施した。田中氏による論文概要の説明があり、その後に審査委員4名からの質問ならびに評価がおこなわれ、以下の結論に達した。

### 審査要旨

#### 1. 本論文の概要

本論文は、環境社会学や社会運動論の分野でほとんど検討されずにきた豊前火力発電所建設反対運動について、立教大学に保管されていた運動団体の新資料を丹念に検証しながら、この運動の歴史的経緯とそこに孕まれた課題を包括的に分析し、環境社会学や社会運動研究に対してあらたな知見を提示することを目的としている。

具体的には、立教大学共生社会研究センター所蔵の未整理史料群の調査から得られた新史料（運動体のパンフレット、リーダーの手記、会議の録音テープ、九州電力のチラシや冊子等）を読み進めることで、豊前火力反対運動が同時代の他の運動と異なる特徴を持つこと、ならびに豊前火力反対運動で提起された環境概念が従来の環境社会学の問題性を浮き彫りにする可能性を保持していることを論証することが、本論文の狙いである。分析方法としては、ルフェーブやマッシー等の社会学で展開された空間論・空間概念等を採用し、この反対運動において提起された環境概念が公害を争点とした他の運動が描いた環境概念には還元できない豊かな内容を備えていることの結論を提出している。

以下、章別構成は次の通りである。

## 2. 章別構成

### 序章 分析対象としての環境

#### 0-1 はじめに

#### 0-2 問題の所在

##### 0-2-1 住民運動研究の焦点

##### 0-2-2 争点としての環境

##### 0-2-3 豊前火力反対運動と環境

##### 0-2-4 場所と自然

#### 0-3 本論文の課題

#### 0-4 論文構成

### 第1章 環境社会学とその環境——自然の境界——

#### 1-1 本章の目的

#### 1-2 環境の定義

#### 1-3 環境社会学とその環境

##### 1-3-1 被害構造論とその環境

##### 1-3-2 受益圏・受苦圏論とその環境

##### 1-3-3 生活環境論とその環境

##### 1-3-4 自然の位置付け

#### 1-4 自然と空間

#### 1-5 自然の境界線

### 第2章 身体的感覚と自然の実在性 ——環境の空間論的分析に向けて——

#### 2-1 本章の目的

##### 2-1-1 空間と身体

#### 2-2 支配と領有

#### 2-3 感覚と空間

- 2-3-1 対象の実在性
- 2-3-2 特性の発見
- 2-3-3 領野と秩序
- 2-3-4 焦点としての重層性

#### 2-4 環境の空間論的分析

### 第3章 対象と方法

#### 3-1 分析対象

#### 3-2 豊前火力反対運動の背景

##### 3-2-1 空間の表象としての国土開発計画

##### 3-2-2 周防灘開発計画

#### 3-3 方法と知見

##### 3-3-1 分析の方法

##### 3-3-2 期待される知見

### 第4章 公害反対の社会運動 ——自然の位置と『暗闇の思想』——

#### 4-1 本章の目的

#### 4-2 2つの公害反対運動

##### 4-2-1 2つの自然

##### 4-2-1-1 中津市の反対運動

##### 4-2-1-2 豊前市の反対運動

##### 4-2-2 子供と反公害

##### 4-2-3 自然の位置

#### 4-3 線引きとの闘い

##### 4-3-1 九州電力の論理

##### 4-3-2 運動の分裂

#### 4-4 軌跡としての暗闇の思想

##### 4-4-1 思想の形成

##### 4-4-2 自然の境界線

### 第5章 松下竜一の空間的感覚 ——『豆腐屋の四季』と場所、「棲むこと」——

#### 5-1 反対運動の地平

##### 5-1-1 地平としての松下竜一

##### 5-1-2 「棲む」という感覚

#### 5-2 地平への接近

##### 5-2-1 『豆腐屋の四季』の世界

##### 5-2-2 短歌の形式

##### 5-2-3 短歌と作歌

#### 5-3 日常の静寂と主体としての自然

- 5-3-1 豆腐屋の夜
- 5-3-2 日常の静寂
- 5-3-3 自然との出会い
  - 5-3-3-1 別様の世界
  - 5-3-3-2 生き物へのまなざし
- 5-4 松下の空間的感覚
  - 5-4-1 「住むこと」と「棲むこと」
  - 5-4-2 場所への感覚
  - 5-4-3 場所の多義性
- 5-5 場所と領有
  - 5-5-1 場所の優位性
  - 5-5-2 場所の多義性と日常生活
- 5-6 豊前火力反対運動の地平
- 第6章 場所における境界的感覚 ――石牟礼道子と松下竜一における感覚の異同――
  - 6-1 本章の目的
  - 6-2 比較と対象
    - 6-2-1 石牟礼道子と空間の感覚
    - 6-2-2 石牟礼へのアプローチ
    - 6-2-3 テーマとしての近代と非近代
  - 6-3 境界の感覚
    - 6-3-1 韻律の世界
    - 6-3-2 境界の美学
    - 6-3-3 抑圧された韻律
  - 6-4 2つの空間的感覚
    - 6-4-1 疑いの眼とその異同
    - 6-4-2 場所と私性
  - 6-5 小括
- 第7章 環境権の社会運動 ――場所の地層と自然の実在性――
  - 7-1 本章の目的
  - 7-2 法廷と環境権
    - 7-2-1 環境権訴訟まで
    - 7-2-2 環境権訴訟へ
    - 7-2-3 自然の層とその連関
    - 7-2-4 豊前火力反対運動と環境権
  - 7-3 反火力ネットワークと環境権
    - 7-3-1 草稿と環境権

7-3-2 反火力と身体的感覚

7-3-3 すすめる会と支援

7-4 環境権裁判

7-4-1 生きられる空間と住民

7-4-1-1 住民にとっての基準

7-4-1-2 海岸についての証言

7-4-1-3 住民の空間

7-4-2 「住むこと」と自然の実在性

7-4-3 「棲むこと」と自然の実在性

7-4-4 「人民法廷」と地裁判決

7-5 環境の地平と地層

終章 場所と環境

8-1 反対運動と環境

8-1-1 前期の反対運動

8-1-2 自然の実在性

8-1-3 複数の自然

8-2 重層的な環境

8-3 環境の社会学の課題

8-4 おわりに

### 3. 各章の概要

第1章は、環境社会学の分野における従来の研究について、これまでの環境社会学において自然環境がどのように位置づけられてきたか、この点に焦点を当てながら検討をおこなった。特に、代表的な議論として、第1に被害構造論を、第2に受益圏・受苦圏論を、第3に生活環境論を検討している。加えて、近年の北米における環境社会学の環境論を参照するかたちで本論文における分析方法についても検討した。これらの研究を整理し、自然環境を自然科学の対象としてみなす視点が共通していることを論じた。

第2章は、対象を分析する視点ないし方法として空間論を採用し、社会学を中心とした空間論を理論的観点から整理している。ルフェーブルの理論を起点として社会学における空間論、および近年のマルクス・ガブリエルの実在に関する哲学的議論を参照しつつ、環境を空間としていかに知覚するのかに関する知見をふまえて、感性的知覚という観点から空間概念について考察することの重要性を論じた。

第3章では、次章以降で経験的分析を進めていく前提として、当時の国土開発政策と豊前火力発電所建設計画の事実関係の確認をおこなう共に、本論文の分析資料の位置づけお

よび分析の対象と方法を述べる。豊前火力反対運動は、新全国総合開発計画（新全総）における大規模開発プロジェクトを背景として立ち現れた社会運動である。この運動の争点は、重油の燃焼による大気汚染、温排水による漁業被害といった操業で発生する公害、そして施設の建造にともなう海と海岸の埋め立てであった。従来の公害反対運動における裁判闘争では代理人による法律と判例に基づく言論上の闘いが中心であった。しかし、豊前火力反対運動では、裁判で代理人あるいは法の専門家を原告に一切加えず、弁護士なしの原告 7 名による本人訴訟という異例の訴訟であった。この点からもこの反対運動を分析する重要性を指摘した。

第 4 章から第 7 章は経験的分析である。

第 4 章は、豊前火力反対運動のリーダーである松下竜一が『暗闇の思想』を発表するまでの時期—運動の前期として位置づけられる—を考察している。当初、反対運動は大分県内の様々な既存の団体で構成された大規模な組織としてスタートした。しかしながら、その大人数の運動は九州電力と自治体との間で環境保全協定が結ばれたことで実質的に解散する。その後、一部の住民が反対運動の継続を目的として少人数の別組織を作り、福岡県豊前市の団体も合流した。そのリーダーが作家の松下竜一である。この別組織が環境権という新法理に注目したのである。本章ではこの時期を分析対象として、公害予防の社会運動が、組織的な信条や動員の大小ではなく、個々人の記憶や体験を軸とする運動へと変化していった過程を描く。

第 5 章は、環境をどのように考えていたか、その独自の見方や考え方の上で反対運動がいかに展開したかのかを明らかにすることを主眼に置いて、リーダーの松下の時間・空間的思考を対象に検討を加えた。分析の対象として、松下のデビュー作『豆腐屋の四季』を取り上げ、豆腐屋を営むかれの仕事場やよく散歩に出かけた海岸など、具体的な場所に依拠しながら、人間以外の動植物に対する感動を軸にして、独自の空間論が述べられていたことを明らかにしている。

第 6 章では、第 5 章で述べた松下の空間概念を、石牟礼道子との比較を通して、より詳細に検討を加えている。

石牟礼道子の『苦界浄土』を読み解くなかで、筆者は一つの特徴を析出している。石牟礼は眼前には存在しない時間と空間を導き入れることで、主客の二分法に解消されえない身体と韻律へとアプローチする。例えば『苦界浄土』での病室の男性を描いた場面では、身体の沈黙と胸の上の本が見せる生と死、病室と海の時間と空間が交錯しており、それまで不在と見なされてきた韻律の世界が、眼前の世界にとっての遠景として立ち現れる。それにより、眼前の世界が以前とは異なった様相を見せ始め、近景と遠景の関係は逆になっていく。そのように目の前の時間と空間を象る境界線をずらし、韻律の世界の時間と空間を引き込むのである。このような特徴を持つ石牟礼と松下に共通するのは、経済主義的な思考や近代

的な価値観が身の回りの世界に侵食しているという認識である。松下もまた『暗闇の思想』で述べたように、高度経済成長期がもたらす自然の破壊と、街の喧騒と煌めきが虚飾だと見なす視点をもっており、近代化がもたらす負の側面を石牟礼の松下も共通に認識している。

ただし両者は人間と自然との関係を理解する際にまなざしを向ける方向が異なる。石牟礼は失われたもの、あるいは失われつつあるものを見ようとする。例えば『苦海浄土』第一部からの引用にもあるが、水俣病の被害者たちの姿に往時の不知火海や水俣の在りし日を映し出す。石牟礼は現在にその面影だけを残すような世界に憧憬し、それを真正なものとして描く傾向が認められる。それに対して、松下は石牟礼と異なり、失われたものや失われつつあるものが関心の中心にない。松下は在りし日への憧憬ではなく、日々の暮らしの中に感動を発見することに喜びを感じる。つまり、松下のまなざしは過去ではなく現在へと向けられており、生まれきたもの、あるいは生まれつつあるものに関心を寄せる傾向がある。確かに両者の感覚は、ここにはない世界を捉えると言うことはできる。だが、石牟礼が向こう側にある未分化の世界に注意を向けるのとは異なり、松下はあくまでも眼前の世界を注視する。松下は目の前で起きていることを見る。以上、両者の共通性と差異を論ずることで、松下の独自の時間・空間を描き出している。

第7章では、後期とも言える豊前火力反対運動の変化と環境権の裁判について考察を加える。第4章で述べたように、大所帯の組織であった反対運動の終息後、松下を中心とする少数の住民は運動を継続した。その際に他の反火力運動と協力や支援の体制を築くことで、運動の方向性を修正した。豊前火力反対運動が地域越境的な社会運動であり、それらのネットワークをとおして環境をより多角的に捉えるまなざしが強化されていったことも考察する。この多角的な把握は、反対運動は裁判法廷で、第5章と第6章で論じた松下の空間論を基軸としながら、人々の生活史や動植物の存在や働きが環境を構成するものとして、さらには渡り鳥や海と海岸に生息する微生物までも視野に入れながら、多様な時間と空間が編成された世界として環境を語っていたことに示されている。この点を本章では明らかにしている。

終章では、豊前火力反対運動で示された自然の重層性について整理した上で、環境社会学と近年の環境論にとって、この豊前火力反対運動が提起した環境概念が持つ歴史的・社会的意義について指摘し、今後の課題についても述べている。

#### 4. 講評

本論文は、環境社会学や社会運動論でこれまでほとんど検討されずにきた豊前火力発電所建設反対運動について、運動団体の新資料を丹念に検証しながら、この運動の歴史的経緯とそこに孕まれた課題を包括的に分析し、環境社会学の研究に対してあらたな知見を提

示している点で、委員全員が、博士論文として十分に評価できると判断した。また、実証的研究として手堅いだけでなく、具体的対象をベースとしながらも環境思想について理論的な検討を加えるなど、新しいアプローチが提起されているとの評価がなされた。

特に、松下竜一をリーダーとするこの運動によって提起された「環境」概念が、松下の短歌や『暗闇の思想』『豆腐屋の四季』などを対象とした詳細な検討ならびに石牟礼道子の作品との比較研究を通して、環境思想的に豊かな内容を備えていること、すなわち終章で自然に対する人間との関係性の多層性を3つの位相から具体的に明らかにしたことの意義はきわめて大きいとの意見で全員が一致した。

一方で、いくつかの今後の課題が指摘された。第1は、人間との関係性の多層性を3つの位相から具体的に明らかにしたとはいえ、「物質としての自然」「存在としての自然」「生命としての自然」という場合の概念の使い方がやや説得力を欠いていること、さらにこの3つの位相がいかなる関係にあるのかの説明が不足しているため、今後の実証的研究に必ずしも活かしきれないのではないか、という指摘であった。

また、この指摘にもかかわるが、「場所」「空間」「環境」といった基本概念の布置関係をより明確にする必要があるとの指摘がなされ、今後、概念の活用や概念形成をより慎重におこなうべきである、との助言もなされた。

第2は、本論文では、環境を知覚する際に立ち上がる「空間」が重点的に分析されているものの、一方で「時間」の重層性という観点と関連させながら空間構成の問題を捉えることが十分に行われていないことが指摘され、この時間性にかかわる側面を考慮するならばより説得的な結論を導き出せたのではないかとの意見も述べられた。

第3は、今日、環境法の分野では、この運動が行われた1970年代から約50年が経過したなかで、「自然享有権」「自然の権利論」が提起されているが、それにほぼ重なり合うものとして松下の「環境」概念が提起されていたことを考えれば、結論部分でこの運動の今日的意義をより積極的に述べるべきであるとの評価もなされた。

以上、いくつかの重要な評価や指摘がなされたが、それらは博士論文としての水準を損なう性格のものではなく、学位申請論文として「合格」であるとの意見で全員が一致したことを、ここに報告する。